序

2015年12月に開催した、国際日本文化研究センター（日文研）第48回国際研究集会「万国博覧会と人間の歴史」の記録として、本冊を刊行する。

はじめに、研究集会3日目の公開セッション「アジアの万博」に基調講演者のお一人としてお招きした呉建民氏（博覧会国際事務局［Bureau International des expositions］名誉議長、元駐仏中国大使・中国外交学院院長）が、その後ほどなく、不慮の事故によって他界されたことをここに記し、謹んで哀悼の意を捧げる。

万博をめぐる国際政治がアジアに中心を移しつつある現在、呉氏はその動きの象徴とも言える存在であった。2010年上海万博開催の経緯を中心に、平和的催しを通じて多様な文化を大切にする国際社会を形成したいとの思いを語られた当日のお話もさることながら、呉氏自身の品格ある佇(たたず)まいに、お迎えしたわれわれ皆が魅了された。

会議が終了して帰国されてからは、国際研究集会の母体である共同研究プロジェクトの今後の展開について、あたたかい激励の言葉に加え、いずれ中国、とりわけ上海でこのような国際会議を開くとよいこと、さらに、パリに本部を置く博覧会国際事務局と積極的に関係を築きながらプロジェクトを進めていくべきことなど、具体的なご助言を頂戴した。ご期待に応えるべく気持ちを引き締めていたところへの訃報に、どれほど落胆したことであろう。

むろん、先に進まなければならない。呉氏がその存在を喜んでくださった共同研究プロジェクトは、国際研究集会でメンバーそれぞれが得たものを糧として、ご助言の方向へ近づくよう努力しながら、活発に活動を続けている。

さて、本国際研究集会は、2013年度から3年計画で進めてきた共同研究「万国博覧会と人間の歴史――アジアを中心に」の一環として、その成果を諸外国の研究者と共有することを目的に実施したものである。共同研究の成果としては、国際研究集会にわずかに先立つ2015年10月、思文閣出版から、会議と同名の論集『万国博覧会と人間の歴史』（佐野真由子編、計748頁）を刊行したところであった。国際研究集会はその内容を具体的に踏まえる形で企画し、ここでの議論を通じて、それまでに追求してきた方向を確認するとともに、より広範なネットワークを得て次の展開を検討するという意識を持って開催したが、その狙いは参加者各位の熱意によって十分に果たされたと思う。これをジャンプ台として翌2016年度からは、新たな3年計画の共同研究「万国博覧会と人間の歴史」が発足している。

日本では1970年の大阪万博前後から万国博覧会の研究が始まり、関連分野の研究者には周知のことだが、今日までにかなり厚い蓄積がある。われわれの共同研究は、その発足以来、先行研究の果実から多くを得る一方で、いくつかの角度において従来の研究傾向を打ち破り、21世紀の世界において有意な、新たな万博研究の方向をつかもうとしてきた。その内容は上記の論集『万国博覧会と人間の歴史』の序文（「はじめに――本書について」）に、ある程度整理して述べたので、ご関心を持ってくださる読者にはそれを参照していただくことをお願いし（本冊の巻末資料として、同書序文および目次を英訳版とともに収録した）、ここで重ねて紙数を割くことを控えたいと思うが、とくに問題意識の根底にあったのは、「万博研究の国際化」という目標であった。

そもそも国際的な催しである万国博覧会について「国際化」を言うのは、いかにも矛盾しているようだが、実のところ万博の研究は、日本のみならず各国において、それぞれ自国が開催、または参加した経緯に目が向けられるのが常套であり、意外にも国際性を欠いた研究傾向が強かったのである。19世紀以降の世界の近代化の歩みを牽引し、かつ鏡のように映し出してきたこの巨大催事の、いまだ語りつくされてはいない歴史的・今日的意義を引き出すうえで、この傾向を覆し、万博自体が本来持っている国際的視野を、万博の研究においても取り戻すことが重要な課題であると考えられた。日文研の通常の共同研究における制度的制約のなかで何とかその課題に取り組もうとしてきた当研究会にとって、国際研究集会という機会がとりわけ貴重であったことは言うまでもない。

国際研究集会のプログラムは巻末に掲載したが、簡単に企画趣旨を述べておきたい。１日目のセッションは、諸外国から初めて本共同研究に参加する研究者に対して、上に触れた論集『万国博覧会と人間の歴史』のエッセンスを紹介することを主目的としたものである。論集の柱とした４部門「博覧会の人」「博覧会の場所」「博覧会と仕事・社会」「博覧会の形成と展開」のうち、セッションの時間的な条件もあって、先の三つを取り上げることにし、各部門の趣旨が特徴的に現れた論考の著者に発表をお願いした。論集の部門構成については、やはり同書の序文に譲る。

これに続いて２日目には、今回初めて共同研究に参加した外国人研究者らに集中的に発表していただき、その際、共同研究班員（論集執筆陣）が交代で司会やコメンテーターを務めた。ここでは、普段の共同研究会では取り込み切れなかった万博への研究アプローチがいくつか示され、国際研究集会ならではの議論が展開された。

第１セッション「万国博覧会の日本とグローバル・ヒストリー」に置いた２本の発表は、いずれも歴史上の万博に参加した日本に注目したもので、その点においては日本で従来から厚く行われてきた研究の路線を引き継いでいる。しかし、これまで日本の万博参加を取り上げた研究は多くの場合、参加の狙いとして、また結果として、万博の場で日本（文化）の異国趣味が強調され、さかんにもてはやされながらも、国際社会の構図

に周縁的他者として位置づけられることになった経過を語ってきた。それに対して今回のお二人の研究は、そもそもの着眼においてその視点を脱し、19 世紀、すでに国際貿易や知的交流――その舞台としての万博――の能動的なアクターとして台頭していた日本の姿を、史料に基づいて客観的に描き出すものであった。ひいては西洋側を含む多様な万博参加国を互いに相対化してみせた点でも、従来の研究を大きく更新し、今後の万博研究の豊かな可能性を示したのである。

第２セッション「万国博覧会における『異文化』――比較検討のために」、第３セッション「博覧会の開催とそれぞれの近代」は、フィリピン、インド、ブラジル、中国の事例に関する計４本の発表で構成した。万博への参加という角度で論じている前二者、博覧会の開催という側面を見ている後二者でセッションを区分したが、両方を総合して、国際研究集会ならではのスケールの大きな比較研究の場面となった。これらの各発表が、それぞれ非西洋の一国と万博とのかかわりを取り上げた視角は、実は上記の第１セッションとは逆に、日本で、日本に関して従来から積み重ねられてきた研究傾向に近い。日本の事例をここに並べることができなかったのが悔やまれるが、このような形での国際比較は世界の万博研究史にもほとんど例がないと言うことができ、きわめて刺激的な議論が展開されたことを報告しておきたい。

本冊に収載したのは、これら２日間の発表のうち、計９本である。それぞれのご多忙のなか、会議終了後、あらためて原稿をまとめてくださった執筆者にこの場を借りて感謝を申し上げたい。論文として書き直された方もあり、口頭発表の記録として提出された方もいらっしゃるが、それぞれの希望されるスタイルのまま掲載した。そのため読者が不便を感じられるところは、編者の責に帰する。また、予算の限界とはいえ、せっかくの多岐にわたる事例をすべて日英両語で紹介できなかったことを残念に思っている。なお、巻末には、２日間の発表すべての会議開催時点におけるアブストラクトを和英両語で収録した。

このあと３日目には、午前中の２時間、２日間を振り返っての総合討論を行い、言うまでもなく活発な議論が展開された。ここから得たものは参加者それぞれに異なると思うので、恣意的なまとめを試みることは控えたいと思うが、筆者の視点からは、万博研究がいわゆるアイデンティティー・ポリティクスという視角を外れても（あるいは、それを脱することでさらに）大きな可能性を持つのか、やはりその視角こそが万博研究の核にあり、それを国際連携によって追求することが今後の課題であるのかという（対立）論点が暗黙裡に存在し、しかも必ずしも結論を見なかったことが、とくに印象的であった。

むろん、これからの万博研究においてそのいずれかを選択しなければならないというわけではない。それぞれを得意とする研究者の路線を包含しながら進展させていくものに違いないのだが、この点にことさらおもしろさを感じるのは、現実の国際社会運営に

おいてもバランスが求められる二つの路線が、この議論に象徴的に表れていたからである。翻って、万博は国際社会形成のあり方をさまざまなレベルにおいて鏡のように映し出す器であり、この器を通して近代以降の世界を見ることには意義があると考えられる。

そしてさらに、万博は世界を「映し出す」だけにはとどまらない。万博は世界を、またそこに参加する国々を「力づける（empower）」舞台なのだという捉え方が、この日の議論のなかで、エドソン・カバルフィン氏――前日のセッションでは、フィリピンの建築史を通じたすばらしい発表をされた――から示された。これが、上述の論点を超えた一つのキーワードとして、おそらく全参加者の強い共感を得たことを、ひとまず記録しておきたい。

３日目の午後には、国際研究集会に付随する公開講演会の形をとって、「アジアの万博」と銘打つセッションを実施した。日本の戦後万博史を担ってこられた堺屋太一氏（作家、元国務大臣経済企画庁長官）、冒頭にも記した中国の呉建民氏という、まさに「アジアの万博」を体現するお二人を基調講演者に迎え、引き続き、共同研究メンバーから橋爪紳也氏（大阪府立大学教授）、江原規由氏（（一財）国際貿易投資研究所主任研究員、元上海万博日本政府館長）が加わっての座談会を、500 人のお客様に聞いていただいた。

最終日の４日目には、日文研の地元京都に着目したテーマ・ツアー「博覧会と京都の近代」を用意し、外国からの会議参加者はもちろん、国内の共同研究メンバーにも、博覧会研究三昧の京都歩きを楽しんでいただいた。京都は万国博覧会開催の経験こそないが、明治初頭から日本国内の博覧会開催史をリードし、また、数々の優れた伝統工芸が、ほぼ例外なくと言ってよいほど、海外の万博への出品経験を重ねて今に続いている――その意味で、類い稀なほどの「博覧会都市」なのである。当日の詳細は巻末のプログラムをご覧いただきたい。

先にも書いたとおり、この国際研究集会を重要な通過点として、共同研究はすでに次の段階に進んでいる。人間の歴史を見る窓としての、総合的な「万博学」と称しうるものを構想したいというのが、われわれの次の目標である。そうした過程で、この国際研究集会にお招きした外国人研究者らとの協力関係が継続し、深まっていることも、研究集会自体の成果として記しておきたいと思う。

最後に、ともに当事者として国際研究集会の開催を支えてくださった、共同研究班員の方々、また、会議スタッフとして大変な努力をしてくださった日文研研究協力課の皆さん、そして本報告書の編集にあたってくださった同出版編集係の皆さんに、あらためて、心から御礼を申し上げたい。

2017 年 3 月

佐野真由子